

明恵の三時三宝礼拝 再考

研究生 高橋 寿光

本研究では島地大等氏、石井教道氏、三宅守常氏、田中久夫氏などによる研究以降、主立った研究がなされていないかったことを鑑み、三時三宝礼拝における教義的根拠・成立の背景ならびに法然からの影響などを改めて検討することを目的とするものである。

『三時三宝礼積』に示される三宝礼拝は法然『選択集』からの影響を多分に受けていることは疑いようがない。それは①『選択集』批判の中心にある菩提心について、その重要性を再説し宣揚したこと、②菩提心の重要性を宣揚するにあたって法然の易行という行態の援用、③最下層の在俗の者たちへの積極的教導である。また、『摧邪輪』執筆以降の明恵の動向全体から見た場合、③で述べたような民衆への積極的な関与（教化）がみられ、その延長線上に三宝礼拝があったという見方もできるのではないかと考えられる。

その一方で、三宝礼拝そのものは法然の称名念仏とは易行と雖も似て非なるものであり、たとえば、同様に往生の行であるとしても、それによって得られる浄土は有相の浄土ではなく、無漏淨識所変の浄土であるとしている。

また、三宝礼拝の場合は、

万相莊嚴金剛界心——自性——大円鏡智——普

大勇猛幢智慧藏心——智慧——平等性智——賢
如那羅延堅固幢心——精進力——妙觀察智——行
如衆生海不可尽心——願心——成所作智——願

というような相順関係にあり、三宝礼拝すなわち普賢十願の修行であって、三宝礼拝によって普賢十願を成就し成仏にいたる妙道であるとする、華嚴の思想に基づいたものである。そしてそれは、

発心シテ行セバ始ニハ念ルトモ、功ヲツマバ性ヲナサ
ム（『日藏』74、175上）

というように段階的の向上を目指さしめるものである。

また、明恵の場合は口に「南無阿弥陀仏」と称えるというような定まった行態をとらず、「南無三宝後生タスケサセ給へ」「南無三宝菩提心、現当二世所願円満」（『日藏』74、176上）と唱えてみたり、あるいは心の中で思うだけでもかまわないとするなど状況によって修することを勧めており、むしろ「心ノ内ニ敬重ノ儀」（『日藏』74、176下）あることを重視している。それは、易行という形態をとりながらも、それが最勝なのではなく、機根に応じた行なのであり、その行果はあくまで劣で段階的に向上していかなければ、往生行としての側面はもちつつも、絶対的な行としてはとらえられていないのである。